（２）

ほんま ぶんこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
（２）

【Ｎコード】
Ｎ４２１３ＢＡ

【作者名】
ほんま　ぶんこ

【あらすじ】
人の中身は　なんじゃろな　の続きです
※もちろんフィクションです

大半を占める時間をこの自宅で過ごしているのだから、嫌でもこの自宅の有様が目につく。

職場に新しく入った社員をなんとなく気になりだし、無意識に目で追い、いつの間にか好きになっていたような感覚だ。
いや、それはないか。

リフォームしたが自宅には変わりない。昔の面影はないようだけれど。
何故昔の面影を知っているかというと写真を見たから。

その写真をいつ見たのか忘れてしまったけれど、時間が有り余る今は、記憶の引き出しに仕舞い込まれた出入りが激しいアイテムだ。

初めに浮かぶ写真は、二階六畳間にある勉強机で、教科書を読む私、ではなく、
子供の頃の母の、色褪せた写真。金太郎みたいな髪型と赤いセーター、紺のスカートを穿く女の子が写っていた。

顔、頬の部分に赤茶色の塗料のようなものが塗られている。
母に訊くと、赤チンというものだそうだ。赤チンとは何かと訊くと、消毒液の一種なのだそうだ。

転んで、顔も膝も擦りむき、膝に砂利がつまってねぇ、などという激痛話が始まり、話題を変えたが。
この時代の母は何を考えていたのだろう。想像もつかないけれど、まさか自分の子供がこの部屋を使用するとは、予想もしなかっただ

ろう。
当然か。

古いアルバムには祖母もいた。一階台所で撮られた写真で、ひきつり笑いのような表情をしていた。
地毛かパーマか知らないが、癖のある白髪頭と白い割烹着、グレーのパンツを穿いた姿で写っていた。
この祖母は写真でしか見たことがない。母が子供の頃亡くなったからだ。

同じ家に住みながら、私は祖母とは会えなかった。
会えなかった人と今、同じ空間に住んでいる。そう考えると変な気分だ。

色褪せた写真の女達が、皆同じ顔をしているのも変だけど。
その時代により髪型や服装はそれぞれ違うけれど、色素の薄い狸、豆狸みたいな女達の写真、という記録が誰かの気紛れで残っていた。
理由なんてきっと、新しいカメラを買ったから試し撮りした、なんて安易なものだろう。それらの写真を見て思うことといえば、

一体何の意味があるのだろう、ということくらいだ。

遺伝の意味は詳しくは知らないけれど、要は優れたものを残し、死ぬのだから、豆狸みたいな容姿を残すことになったのだろう。

何故なんだ。

意味がわからない。

だから内面的な部分に目を向けようと努力したが無理だった。
容姿が気になって気になって。
何故揃いも揃って、こんなに同じ容姿なのか、と。
贅沢だと罵られるかもしれないけれど、私はこの容姿に不満足だ。
受け入れられない。
受け入れられないと駄々を捏ねても、初めから受け入れて生まれてきたけれど。
こんな豆狸みたいな容姿だから面接落ちるんだよ、という方向に向かうから。

不況が私を退廃させる。退廃って言ってみたかっただけだけど。
もう何かのせいにしなければ、精神が崩れそうで、と、ちょっと変な思想にかぶれてみる。
　失職中ということもあり、啓発本の類いを数冊読んだものだからつい。
こうして知らないうちに人って、ナニモノかに形成されていくのか。
実際は何も知らないのに。
だって事実は失職中で、家もあまり裕福ではなく、容姿が祖母と母のコピーみたいな、豆狸みたいな私、ですから。

取り立てて語るほどもないちっぽけな人間。

だから人間の記憶って何の役に立つのだろうか、それらに関して一体何の意味があるのだろうか、と振り出しに戻ってしまうが、

人間、という括りで自身が逃避しているのね、という体も心もちっぽけな、私の脳みその片隅には冷静な自身もいる。

それでも、考えずにはいられない。

父は初めからいないが、祖父がいた。

語りたくないが、自分はナニモノなのか、といっても失職した私以外のナニモノでもないが、こう負の連鎖に巻き込まれると、自分の何が悪かったのか、悪かったのならどうすればいいのか、と内省する時間を持て、と啓発本に書いてあったから。

祖父。私はこの人が嫌いだった。この人には容姿を散々馬鹿にされた。

祖父とは母の父で、

私が中学の時に死んでしまった。

庭の金木犀が香る頃、居間で昼寝中そのままあの世へ逝った。母が見つけた。

眉間に皺のある猜疑心たっぷりの顔が浮かぶ祖父は、社会規範に反する人間は生きる資格がない、と本気で考える人だったので、いわゆるシングルマザーの母や、その子供の私にも冷たかった。　外面だけ良い祖父にとってのストレス解消の道具が私で、顔を合わす度に決まってこういうのだ。

ぶくぶくぶくぶく肥りやがって食って寝てばかりだからだろ？　ダイエットでもしろ目障りだ、という台詞を挨拶するように。

言われる度に私は大量に食べ太った。悪循環だった。

が、祖父が亡くなった後はスルスルと痩せた。

高校入学の頃には標準体重より痩せていたくらいだ。

痩せたことと祖父との関連性はないかもしれないが事実だ。

他にも不愉快なことは鮮やかに浮かぶ。不愉快なことほど、記憶に残るのも不思議だけれど忘れたいので省略。

語るといったくせに。

こうして今、この家に母と私だけが残り、私はここに存在している。

存在している選択は私がしたわけではないが。

存在、などと、上辺だけ読んだ啓発本から抜粋しているが、実際は自分の存在なんかどうでもいいと思っている。

きっと言葉を使用するうちに段々知った風な自身が出来上がり、そのうちそれすらも忘れ、

全て自身が経験し学んだことだと勘違いして死ぬんだ、たぶん。

事実は、祖父が、母と私にストレス解消の為に罵詈雑言を浴びせ続

けた日々だった。

その根性悪の祖父が居間で昼寝中に、死んだ、ということ。
また、父の顔は知らないので語りようがない、ということ。

自分を知るための一応は向上する為に啓発本を読み、実行したが、
気持ちがブルーになった。

高校卒業後、就職した。家庭の経済的理由もある。

婦人服売場の販売を異動しながらも続けたが、現在、しつこいようだが失職してしまった。

母は、母の妹が経営する美容室で普段通り働いている。

ということを啓発本通りに、内省文をパソコンに延々打ちわかったことは、

私にはこの手の本は合わない、ということだった。

肯定したり否定したりと、頭がパーになりそうだったからだ。
なんという無駄な行いだろう。

バカの極みではないだろうか。

ため息をつき、パソコンを閉じた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4213ba/

（２）

2012年1月11日02時48分発行